

Poe と Hawthorne の関係 (その 3)

— Poe の1847年の Hawthorne 論 —

松 山 信 直

I は じ め に

過去二回にわたって、ポーの1842年のホーソーン論から始まる二人の関係について考察を進めてきたが、¹ 既に述べたように、ホーソーンは1846年6月に出版した第二の作品集 *Mosses from an Old Manse* をポーに寄贈し、ポー宛の最初で最後と思われる手紙を6月17日付けで送った。² ところが、ポーは *Mosses* を送られたことについても手紙に対しても、ホーソーンに何も書き送らなかつたらしい。そして、これから約一年半経た1847年11月になって、ポーの最後のホーソーン論になる “Tale-Writing—Nathaniel Hawthorne” が、*Godey's Magazine and Lady's Book* に発表されたのだった。³

この一年半ばかりの隔たりが何を意味するのか、今となつては推測するしかないが、一つには、前回述べたようにホーソーンの手紙に対するポーの不満があったと思われる。⁴ さらに、ポーの身辺が忙しかったことも事実だった。ポーは1846年の5月から *Godey's Magazine and Lady's Book* に “The Literati of New York City” を連載し始めたが、その執筆に忙しかったばかりでなく、イングリッシ (Thomas Dunn English) を剽窃と無知故に批判した7月号の “Literati” の記事に対して、イングリッシ自身の反論とポーへの非難が *Evening Mirror* に載せられ、さらに同じ反論が週刊誌の *Weekly Mirror* にも載って、⁵ ポーは *Mirror* の編集者 Hiram Fuller と A.W. Clason を相手どつて誹毀罪で訴えた。⁶ この裁判は1847年2月まで続いてポ

一の勝訴に終わるが、ポーの批評家としての名声を著しく傷つけただけでなく、⁷ 病状の悪化した妻 Virginia の看病疲れとも重なって (1847年1月30日妻死亡)、ポーの健康を著しく害してしまった。⁸

このような落ち着かない状況と、かなり金銭的にも逼迫していた苦しい生活のため、⁹ ポーは1846年の6月から次の年の2月頃まで、精神的にも肉体的にも極限的な状況にあったと思われる。ホーソーンの手紙や *Mosses* の寄贈に対して迅速な反応が見られなかったのも、無理のないことだった。しかし、このような状況の中で、ポーは最後のホーソーン論になる評論を1846年の12月頃には用意したらしい。¹⁰ ところがこの原稿を預かった出版者の Louis A. Godey は、訴訟問題でポーの評判が悪化したことを憂えたためと思われるが、問題を引き起こす元になった “The Literati of New York City” の掲載を既に1846年10月で打ち切っていて、ホーソーン論の方も何時出版されるのか見当がつかない状態だった。だが幸いなことに、医学生でポーの若い崇拜者となった George W. Eveleth 等の口添えもあって、¹¹ ホーソーン論は1847年11月にやっと *Godey* 誌に掲載されることになった。

さてこの様にして日の目を見るようになったポーの最後のホーソーン論 “Tale-Writing” は、*Twice-Told Tales* と *Mosses From An Old Manse* の書評の体裁をとったが、ポーは個々の作品の論議は「今準備している書物に委ねる」(XIII, 154) と言って、最後の方で “Young Goodman Brown,” “The White Old Maid,” “Wakefield,” “Little Annie’s Ramble” (154–55) の四作品にほんの一言触れただけだった。この評論の本体は、一般論的にホーソーンの特徴を論じ、これまでポーがホーソーンに与えてきた高い評価にかなりの修正を加えることになった。その全体の要旨をまとめてみると次のようになる。

1. ホーソーンに対する一般読者の無理解 (inappreciation) (XIII, 143) (“Literati” の引用¹²の敷衍)。
2. 独創性 (originality) と特異性 (peculiarity) 特有性 (idiosyncrasy)

(143-44) と作家の人気。

3. ホーソーンの独創性の否定。Tieck の作風との類似。従ってホーソーンは特異 (peculiar) というだけ (145, 154)。
4. 一般読者の賞賛を妨げる第二の要因としてのアレゴリー化の傾向 (strain of allegory) (147)。
5. アレゴリーについての誤謬 (148-49)。
6. 短い作品の効用, 効果の重視, 長編作品の否定 (150-54)。
7. 結論 (154-55)。

これまで二回にわたって論じてきたポーとホーソーンの関係からみて、この評論で問題になるのは、3の Tieck との関連の下での独創性の否定、4の新たに出てきたアレゴリー問題、そして、7の結論に含まれ、すでに指摘したコンコードやボストンの文人・知識人達——ポーの表現を使えば「ずうずうしい派閥」(42/5, XI, 110)——とのつながりを断てという点、だろう。紙数の関係もあるので、ここではこの三点に絞って考察したい。

II Originality の否定

ポーはこの1947年のホーソーン論を、“The Literati of New York City”の序文中のホーソーンに関する記述 (XV, 3-4) に言及することから始め、「ホーソーンのことを、個人的に崇拜されているが公には賞賛されていない天才人のこの国における最たる例だ、と呼んでも、私は間違っていないだろう」(XIII, 142) と言う。ポーはさらに言葉を続けて、ところが、ホーソーンが一般の人々に賞賛されないのは、金持ちでもいかさま師でもないからだが、そのすくなからざる所以は、ホーソーン自身の非常に顕著な特徴にあると言う。ポーの言うところによると、「ある意味で、特異なこととは独創的ということであり、真の独創性ほど高い文学的価値は他にない。」(143) ところがしばしば軽率に言われているのは、独創的な作家は常に人気を得ることができない、かくかくしかじかの人は余りにも独創的なため大衆に理解

されない、ということだ。だが、人気が無い、理解されないというのは「余りにも特異」で「余りにも特有な」ためだと言うべきである、とポーは主張する (143)。ポーが言いたいのは、「ホーソーンが真にオリジナルであれば、大衆に感じさせることができないはずはない。だが実のところ彼はいかなる意味でもオリジナルではない」ということである。この言葉は、いうまでもなく、1842年に「あらゆる点で彼はオリジナルだ」(42/5, X, 110) と言ったポーの評価を全面的に覆すものである。すでに論じてきたように、ポーのホーソーンに対する見方は次第に厳しくなっていたが、「オリジナルだ」という評価は一貫して続いていた。ところがポーはそれも変えてしまったのである。

ポーがこの1847年の評論で、ホーソーンは“peculiar”だが“original”でないと言い出した根拠は何であったか。ポーはここで当時のアメリカで有名だったドイツのティーク (Ludwich Tieck [1773-1853]) を引き合いに出し、「ドイツの作家ティークの作品のいくつかにみられる作風は、ホーソーンによく見られる作風と全く同一である」 (“[Tieck’s] manner, in *some* of his works, is absolutely *identical* with that habitual to Hawthorne.”) (XIII, 144) と述べ、更に次のように書いた。

... the critic (unacquainted with Tieck) who reads a single tale or essay by Hawthorne, may be justified in thinking him original; but *the tone, or manner, or choice of subjects, which induces in this critic the sense of the new, will*—if not in a second tale, at least in a third and all subsequent ones—*not only fail of inducing it, but bring about an exactly antagonistic impression.* In concluding a volume, and more especially in concluding all the volumes of the author, the critic will abandon his first design of calling him “original,” and content himself with styling him “peculiar.” (145) (イタリック体は筆者)

ここでポーが言っていることの一部は、既に1842年4月の評論以来、多少

異なった表現をとりながらポーが一貫して述べてきたことの帰着と見なしてもよからう。今あえてその要点を繰り返してみると、1842年4月の“insufficient diversity in these themes themselves, or rather in their character” (42/4, XI, 103) の指摘から始まって、5月の論評では“a somewhat too general or prevalent tone . . . of melancholy and mysticism” だとか“insufficiently varied” な主題を指摘して、“versatility” がさほど無いと言い (42/5, XI, 113), 1844年12月の“Marginalia 79” では“little or no variety of tone” を取り上げ“He handles all subjects in the same subdued, misty, dreamy, suggestive, in[n]uendo way.”¹³ と述べた。そして、1846年5月の“The Literati of New York City” では、“he is fairly to be charged with mannerism, treating all subjects in a similar tone of dreamy innuendo” (XV4) と表現した。そして今1847年では、先に見たように、今までより以上に厳しい言い方をして、ホーソーン作品の“tone, or manner, or choice of subjects” の多様性の欠如のため、“an exactly antagonistic impression” がもたらされると言って、ホーソーンがオリジナルではないと主張するのである。

III Ludwigh Tieck

i ティークと二人の関わり

このように厳しくなったポーの批評の最大のより所は、ティークとホーソーンの類似だったが、そのティークを、たしかにホーソーンは読んだことがあった。*American Notebooks* に記しているところによれば、ホーソーンは1843年4月、妻が不在の間に「([Burger の] “Lenore” を訳して) ドイツ語を勉強し」¹⁴ 次の日からティークの短編を読み始めた。だが *Notebooks* に“Slow work, and dull work too!” (AN 370) と書いているように、決してすらすらと読んだわけではなく、4月9日には“went on with Tieck’s tale, slowly and painfully” (AN372) と書き、10日には“plodded onward into

the rugged and bewildering depths of Tieck's tale" (AN377) と言い、11日にも "this eternal tale of Tieck" (AN378) を読んだと記している。これらの記述からみると、ホーソーンは妻の留守の間に言勞しながらドイツ語でティークを読んだらしいが、分量は余り多くないと思われるし、読んだ作品名も明らかでない。不在であった妻は4月11日に帰ってきて、*Notebooks* の記述は原稿の91頁から97頁にとび、日付も4月25日にとんでいる (AN378-79)。その後ホーソーンがティークを原典で読んだ形跡は *Notebooks* にはない。

一方、ポーの作品にはティークへの言及が二回ある。その一つは、1837年6月に *American Monthly Magazine* に掲載された "Von Jung, the Mystic" (1839年の *Tales of the Grotesque and Arabesque* に収録、1845年12月 *Broadway Journal* に "Mystification" と改題して発表) に見られる。この作品の冒頭に次のようなティークへの言及がある。

The Baron Ritzner Von Jung was of a noble Hungarian family, every member of which (at least as far back into antiquity as any certain records extend) was more or less remarkable for talent of some description, —the majority for that species of grotesquerie in conception of which Tieck, a scion of the house, has given some vivid, although by no means the most vivid exemplifications.¹⁵

さらに、1839年9月の *Burton's Gentleman's Magazine* に掲載した "The Fall of the House of Usher" には、語り手がアッシュェー家の末裔の Roderick と共に読んだ本の一つに、ティークの "The Journey into the Blue Distance" があったとされている。(TOM, 409)

また、1844年の "Marginalia 78" には、次のようなティークに言及した引用の過ちが引かれている。

... One of the best hits in this way [i.e., misapplication of quotation] is made by Tieck, and I have lately seen it appropriated,

with interesting complacency, in an English magazine. The author of the “Journey into the Blue Distance,” is giving an account of some young ladies, not very beautiful, whom he caught *in mediis rebus*, at their toilet. “They were curling their monstrous heads,” says he, “as Shakspeare says of the wave in a storm.”¹⁶

ただし、この引用の過ちの例は、ポーの短評を編纂したポリンによればティークとは関係がなく、Bulwer の *Pelham* からのもので、ポー自身がここで引用の過ちを冗談に犯しているのだそうだ。¹⁷

しかし、これらのティークへの言及からみて、ポーがかなり早くから Tieck のことを知っていたことは推測されるのだが、Tieck のどのような作品を読んでいたのかは明らかでない。上のティークへの言及に見られる “The Journey into the Blue Distance” は、1834年に発表されたものだが (“Das alte Buch und die Reise ins Blaue hinein”), アメリカでもよく読まれていた *Blackwoods' Edinburgh Magazine* の1835年2月号に短い紹介記事が載り,¹⁸ 1837年9月には同誌に載ったティークの “Life of a Poet” の解説中で、表題を英訳して言及されている。¹⁹ ポリンやマボットによれば、ポーはこれらによって “The Journey into the Blue Distance” を知り、“The Fall of the House of Usher” で言及したと考えられている。²⁰ だが、ポーがティークをドイツ語で読んだという確証はなく、また、ポーのドイツ語の理解力についても積極的に肯定するような言い方は、今までになさされていないように思われるので、²¹ ポーがティークのことを知ったのは1835年と1837年の *Blackwoods* 誌の紹介記事だったことはまず間違いないことと思われる。

ii アメリカにおける Tieck

ポーが1835年、37年の紹介記事でティークのことを知ったように、ホーソンがティークを原書で読んだ10年程前の1833年頃から、アメリカでもティークのことは紹介記事や抄訳・翻訳等で少しずつ知られるようになっていた。1833年2月の *Blackwoods* 誌にティークの “Blue Beard. A Dramatic Tale”

の解説と部分訳²²が掲げられて以来、ティークは時々この雑誌やアメリカの他の文芸誌にも取り上げられる様になっていたが、ことに1827年に出版されていたカーライル (Thomas Carlyle) の *German Romance* のアメリカ版が1841年にボストンで出版されたことは、ティークの紹介に大きな役割を果たしたと考えられる。この第一巻にティークの小伝と次の短編五編が収録されていたからである。²³

“The Fair-haired Eckbert”

“The Trusty Eckart”

“The Runenberg”

“The Elves”

“The Goblet”

この *German Romance* がアメリカでどの程度読まれたかは、今正確に知る由もない。だがドイツ文学に少なからざる興味を持っていたハーマン・メルヴィル (Herman Melville) もこの *German Romance* を1850年にゲーテの *Wilhelm Meister* と共に借りたことが知られている。²⁴ 恐らく、ホーソンもポーもこの *German Romance* は読んだに違いないと思われる。また、この書物以外にティークを知る手段として、先に触れた *Blackwoods* 誌には、“Blue Beard” の他に、ティーク関係の記事として、次のようなものが掲げられていた。

“The Life of a Poet” (1837.9) [解説を加えながら部分訳] (前述)

“Pietro D’Abano. A Tale of Enchantment” (1839.8) (完訳),

“The Superfluities of Life” (1845.2) (抄訳)

さらに、ティークの作品の翻訳や紹介・論評はイギリス・アメリカの他の雑誌にも多く見られたことを、H.M. ベルデンは詳細に調べて報告している。²⁵

従って、ティークのことはアメリカのドイツ文学の専門家だけでなく、文学界の人々の間でもかなりよく知られていたといえよう。まして、ポーは文学雑誌の編集に深くかかわり、自分の雑誌を持ちたい意図を長らく持ち続け

ていたため、雑誌の記事やその傾向に深い関心を持っていたに違い無く、ティーク関係の記事のことは充分承知していたと思われる。

iii ホーソンとティーク

この一般的なティークについての知識(理解とまで行かなくても)は、ホーソンとティークを結び付けた発言が、ポーの1847年のホーソン評以前に少なくとも三回なされていることから窺える。その最初のもは、*Foreign and Colonial Quarterly Review* (1843.10) に現れた。

“He [Hawthorne] reminds us of Tieck in spite of the vast difference in the material used by the two authors.”²⁶

さらに *Democratic Review* (1845. 9) では、ホーソンを “The Tieck of this American literature of ours” と呼び、²⁷ *Athenaeum* (1846. 8. 8) では “We have elsewhere said that they [stories in *Mosses*] resemble Tieck’s fairy tales, in their power of translating the mysterious harmonies of Nature into articulate meaning.”²⁸ と述べた。

ただこれらの発言は、ティークとの類似を指摘しながらも、二人の違いに注目し、ティークとの類似でもってホーソンの評価を左右しようとするものではなかった。ところがポーの場合には、既に見たように、ティークと作風が同じだということで、ホーソンはオリジナルでないと決め付けたのだった。当然ポーがどれだけティークのことを深く知っていたのか、またどのような点を押さえて二人の類似・同一性を指摘したかが問題になるのだが、上に見たように、ポーがティークについて、当時アメリカで知られていたティークについての知識を上回る理解を持っていたかどうかは、かなり疑問と言えよう。ただ、ポーとティークの関わりについて、D. ホフマンがポーはティークに負うところがあると指摘し、“his own debts to E.T.A. Hoffman, Tieck…” という言い方をしていることが目に留まるが、D. ホフマンは具体的な証拠は示していない。²⁹

さらに、1847年の評論において、ポーはティークとホーソンの類似点を

具体的に示すこともしていない。ポーはこの評論の冒頭部分で、ホーソーンはこれまでにいくつかの雑誌で紹介され論じられてきたが、一般の人々には評価されていないと述べて、ホーソーンを論じた雑誌を四点紹介しているが、その中には、先に見たようなティークとホーソーンを結び付けた論文は入っていない。ポーはこれらの論文が掲げられた *Democratic Review* や *Athenaeum* などを読んでいたと充分推測されるのだが、ベルデンが指摘したように、ポーはティークを引き合いに出して「ホーソーンを非難する最後の一撃」³⁰とするため、ティークに言及した論文の載った雑誌に言及することを意図的に避けたように思える。と言うのも、ポーはティークとホーソーンのつながりの示唆を、1845年4月と9月の *Democratic Review* に載ったホーソーン論から得たと思われるからである。³¹

ただ注目しなければならないのは、ポーは1847年のホーソーン論で、1842年に用いたような「何か剽窃に似た」(42/5, XI, 112) と言う表現や、1844年に“Marginalia 79”で使った“borrow” (Pollin, 181) という言葉も用いていないことである。それはロングフェロー戦争の終焉に使った“secondary origination”という考えを受け入れたためなのか、³² ティークとの具体的類似を示すことが出来なかったためなのか、明らかでない。しかしいずれにしても、ティークとホーソーンの作風の同一性の指摘が具体性に欠け、説得力もないことは明らかである。

先に言及したカーライルの *German Romance* に収められたティークの五つの短編と *Blackwoods' Edinburgh Magazine* に掲げられたティークの作品の部分訳・抄訳に関するかぎり、ホーソーンとの類似は殆ど見当たらないと言っても過言ではない。ベルデンもティークの作品の性格を論じた“Novellen”という記事 (*The Monthly Review*, April, 1841) を紹介し、ティークの作品を踏まえて“his style and method, in the books here spoken of, are nowise ‘identical’ with the style and method—with the ‘manner’—of Hawthorne”³³ と言っている。この事実を確認するかのよう、この時期

以降、ティークとホーソンの類似・同一性が論じられることは無かったように思われる。⁸⁴

ただし、ペルデンはティークについての解説記事の中にホーソンを思わせる記述があることを指摘し、⁸⁵ さらに *Democratic Review* の1845年5月号に載ったティークの“The Friends”はホーソンの“moralised legend”に酷似していて、ポーはこれを読んでティークとホーソンの作風の同一性を主張したらしい、とも述べている。⁸⁶

これが事実だとすると、ポーがホーソンとティークの同一性を指摘したのは、すでにティークとの類似を指摘していたいくつかの評論の尻馬に乗り（もちろん、そうでないとの姿勢をとってのうえだが、ポーが行なったティークとホーソンの係わりの指摘が具体性に欠け、説得力もない事がこの事を雄弁に証拠立てている）、さらに“The Friends”との類似を根拠にして、これまで自分が強く主張してきたホーソンの“originality”賞賛を一挙に覆したのではなかったかと思われる。つまり、ポーは *Mosses* に収められることになる作品をある程度知っており、先に見たように、多様性に欠ける、マンネリズム等とすでに指摘してきた。それを大きく進めて、ホーソンは“original”でなくて“peculiar”だという修正意見を引き出すために、ポーはティークを持ち出したのではなかったかと思われる。

IV アレゴリー批判

1847年の「ホーソン論」で問題になる第二点は、新たに出てきたアレゴリー批判である。アレゴリー、もしくはアレゴリーに近い作品は *Mosses* で初めて登場したのではなく、既に *Twice-Told Tales* にもあったのに（例えば、“The Great Carbuncle,” “Dr. Heidegger’s Experiment,” “Lady Eleanore’s Mantle” など）、なぜポーは今になってアレゴリー批判を持ち出したのだろうか、という疑問がある。

ポーはホーソンの人気のなさの根拠として、特異性、同一性、単調さを

挙げ、*“at his failure to be appreciated, we can, of course, no longer wonder, when we find him monotonous at decidedly the worst of all possible points.”* (XIII, 147) と述べた。この「ありとあらゆる点のうち決定的に最悪の事」と言うのが「アレゴリーへの傾斜」(147) のことだとポーは指摘し、ホーソーン作品はそのため単調になり、一般の人々の賞賛から遠ざかるのだと言う。

ポーはアレゴリーを弁護する言葉は殆ど無いと述べて、

The fallacy of the idea that allegory, in any of its moods, can be made to enforce a truth—that metaphor, for example, may illustrate as well as embellish an argument—could be promptly demonstrated. (148)

と言い、アレゴリーが真実を樹立することがあるとしても、それは文学にとって大切な虚構を覆すことによってであると述べている。一言で言えば、アレゴリーでは意味の示唆がなく、虚構が崩されてしまっていることに問題があるとポーは見るのである。だから、アレゴリーは、虚構の作品の最も重大な点、即ち、真剣さ、つまり逼真性 (verisimilitude) (148) を傷つけてしまい、効果の統一性を妨げる、と言う。だから、アレゴリーはアレゴリーであることを読者に意識させないものをもっとも素晴らしい、ということになる。ポーはその意味で、*Pilgrim's Progress* を “a ludicrously over-rated book” と言い、De La Motte Fouqué の “Undine” (『水の精』) を “allegory, properly handled, judiciously subdued, seen only as a shadow or by suggestive glimpses, and making its nearest approach to truth in a not obtrusive and therefore not unpleasant *appositeness*” (149) の優れた例と見なした。

ホーソーン作品の *Mosses from an Old Manse* には、確かに、アレゴリーじみた作品がある。言うまでもなく “The Celestial Railroad” は現代人の安易な天国行きを *Pilgrim's Progress* をもじってパロディー化した作品だし、“A

Select Party,” “Egotism; or, The Bosom-Serpent,” などはかなりアレゴリーに近い作品だと言えよう。しかし、*Mosses* に収められた作品の全てが純粋のアレゴリーやアレゴリーに近い作品というわけではなく、一見アレゴリーじみた作品でも “Young Goodman Brown” や “Rappaccini’s Daughter” のように、複雑なシンボリズムやそれを成立させる多層的な構造を持つ作品もある。アレゴリーという枠をはめた読み方ではこれらの作品の稠密さを読みとることはできない。H. H. ワゴナーは *The Snow-Image* (1851) に収められた “The Man of Adamant” と *Mosses* の “Rappaccini’s Daughter” について次の様に述べている。

“The Man of Adamant” has considerably more literary value than we should expect of an apologue, and “Rappaccini’s Daughter” has the kind of value we do not find in pure allegory. In both, the texture supplies a complexity that qualifies and deepens the meanings implied in the structure.³⁷

このワゴナーの言葉を踏まえてみると、ポーが1847年のホーソン論において、具体的な作品に触れずに一般論に終始したことへの不満と疑義が際立ってくる。一般論は一つ一つの作品の読みの総体として期待されるが故に、一般論への疑義は一つ一つの作品の読み方への疑義を孕んでいるからである。例えば、ポーは “Young Goodman Brown” を神秘的な幻想的な作品としてしか読まなかったのか、とか、“Rappaccini’s Daughter” を、序文に述べられた作者のアレゴリー好みをうのみにして科学者のアレゴリーとしてしか読まなかったのか、といった疑惑が当然起こってくる。しかも、ポー自身アレゴリー的な方法をしばしば取っているし（例えば、“The Raven”³⁸）、アレゴリーと考えられる作品（例えば、“William Wilson,” “The Tell-Tale Heart”, 等）を自ら書いてはいるが、³⁹ いずれも A=B のような機械的な図式に終わらない虚構の豊かさと示唆に富む意味を持たせている。ポーはホーソンの作品にあるそのような豊かさを読み取らなかったのだろうか。

後年ヘンリー・ジェイムズ (Henry James) がポーのアレゴリー批判を受け継いだことは余りにも有名だが、ジェイムズはアレゴリー批判を具体的作品に即して論じた。例えば、ジェイムズはポーのアレゴリー批判の箇所を引用した後、積極的なポーへの反論の形ではないが、ポーの批判の説得力の無さを補うかのように次のように書いた。特に、二つの作品を取り上げたところに注目したい。

Certainly, as a general thing, we are struck with the ingenuity and felicity of Hawthorne's analogies and correspondences; the idea appears to have made itself at home in them easily. . . . But in such things as *The Birth-Mark* and *The Bosom-Serpent* we are struck with something stiff and mechanical, slightly incongruous, as if the kernel had not assimilated its envelope.⁴⁰

ジェイムズはポーより遥かに穩健な表現をとっているが、上のような作品に即した具体的な論議には、たとえ異論があっても、それなりの説得力があると言えるだろう。

だが、アレゴリー、もしくはアレゴリーじみた作品を自らも書いているポーが、なぜ今になってホーソーンの「アレゴリーへの傾斜」を非難したのか。それは、ポーの結論に頷うことが出来る。

V ポーの結び

ポーはこの1847年のホーソーン論を結ぶに当たって、再びホーソーンのアレゴリー好みに言及して次のように書いた。

. . . allegory is at war with the whole tone of his nature, which disports itself never so well as when escaping from the mysticism of his Goodman Browns and White Old Maids into the hearty, genial, but still Inian-summer sunshine of his Wakefields and Little Annie's Rambles. Indeed, *his* spirit of "metaphor run-

mad” is clearly imbibed from the phalanx and phalanstery atmosphere in which he has been so long struggling for breath. (XIII, 154–155)

ここには、アレゴリーがホーソーンの本姓 (nature) に合わないとか、彼の本性は“Goodman Brown”のような作品にはなく“Wakefield”や“Little Annie’s Ramble”のような作品にあるという指摘があるが、大切なのは、一つは、ホーソーンのアレゴリー好みの根源が指摘され、それによってポーのホーソーン論の円環が達成されたことと、もう一つは、ここに、彼の批評の欠落部分がやがて次の世代によって補完されることの含みが表れていることである。

この結論部分でも、ポーはホーソーンを賞賛することを忘れてはいない。例えば、次のような点をポーは讃め上げる。

“the purest style, the finest taste, the most available scholarship, the most delicate humor, the most touching pathos, the most radiant imagination, the most consummate ingenuity” (155)

しかし、その一方で、ポーはホーソーンのアレゴリー好みは、ホーソーンがボストンやコンコードの文人達と付き合っている故であると決め付ける。先に引いた文の終わりのほうに見えていた“his spirit of ‘metaphor run-mad’”と表現されたアレゴリー好みは、ホーソーンが、ブルック・ファームだけでなく、トランセンデンタリスト達や、ニューイングランドの知識人達と付き合っているから生じてきたのだ、とポーは言うのである。そして、ポーはこの評論を、1842年の評論で言及した「ずうずうしい派閥」(XI, 110)との関わりを断つように忠告するユーモラスな、しかし実は辛辣な言葉で締めくくるのである。この言葉は前回の論文で既に引用したが、念のため再び掲げておこう。

Let him mend his pen, get a bottle of visible ink, come out from

the Old Manse, cut Mr. Alcott, hang (if possible) the editor of "The Dial," and throw out of the window to the pigs all his odd numbers of "The North American Review." (155)

つまりポーのホーソン評は、この言葉をもって、1842年にポーが抱いた「ずうずうしい派閥」とホーソンのつながりへの疑義を完成することになる。1842年に初めてホーソン論を発表して以来、既に見てきたように、二人の関係には、迂路曲折があり、遂に個人的接触のないまま、この1847年の批評で「ずうずうしい派閥」の批判へと帰ってくる円環を達成したことになる。それほどポーのニューイングランドの文化人意識は強かったと言えるし、さらに、アレゴリー的な作品は *Twice-Told Tales* にも少なからずあったのに、今になってアレゴリー批判を持ち出したのも、ホーソンのアレゴリー好みがこの「ずうずうしい派閥」に負うものだとポーが考えたからに他ならない。

ポーの結論に含まれる第二点は、ホーソンの本性を“Wakefield,” や “Little Annie’s Ramble” のような作品にあるとしたことである。この1847年のホーソン論は、先の引用文中に名前が出た四作品以外には個別的な作品に触れることはなく、具体的な作品論を欠くのみならず、これまでのポーのホーソン論と同じく、ホーソンが「単調な」「多様性に欠ける」主題や人物を執拗に描いて何を求めようとしていたのかを問う洞察が全面的に欠落している。先の論文で少し触れたように、この欠落はハーマン・メルヴィルの “Hawthorne and His Mosses” によって補充されることになる。⁴¹ メルヴィルはホーソンの明るさを示唆するポーの言葉 “the hearty, genial, but still Indian-summer sunshine” (154) を逆手に取って、ポーのホーソン論に欠けたホーソンの暗さへの洞察を自分の論旨の主眼点にしたのだった。

... spite of all the Indian-summer sunlight on the hither side of Hawthorne’s soul, the other side ... is shrouded in a blackness, ten times black. ... Now it is that blackness in Hawthorne, ...

that so fixes and fascinates me.⁴²

この言葉によって、逆にポー自身の本質的な明るさが浮かび上がってくると言ったら言い過ぎだろうか。同時にその一方で、この暗さへの洞察によってメルヴィルはホーソーンに接近し、個人的親交を得たばかりでなく、ホーソーン批評の大きな道標を樹立することになる。

ポーがホーソーンに求めた作家同志の個人的接触も実らないまま、ポーとホーソーンの関係はこの1847年の「ホーソーン論」で途絶えてしまった。ここに三回に涉って、従来の研究や伝記に欠けた二人の関係を見てきたが、最後にこう付け加えておこう。ポーは1849年10月7日に死に、1850年3月にホーソーンが *The Scarlet Letter* を出版したことも、1851年8月にメルヴィルが “Hawthorne and His Mosses” を出して、ホーソーンと個人的親交を結んだことも知らなかった。(完)

注

- 1 「“Something which resembles Plagiarism”—Poe と Hawthorne の関係」『同志社大学英語英文学研究』47・48合併号（1989年3月）および「Poe と Hawthorne の関係（その2）——1842年—1846年」同上誌49号（1989年10月）。
- 2 「Poe と Hawthorne の関係（その2）」、13-16頁。
- 3 *The Complete Works of Edgar Allan Poe*, ed. James A. Harrison (“1902”; New York: AMS Press, 1965), Vol. XIII, pp. 141-155. 以下ポーのホーソーン論の引用は Harrison 版により、頁数を本文中に示す。必要のある場合に限り、出版年月と巻数を 42/5, X, 111 のように加える。
- 4 「Poe と Hawthorne の関係（その2）」、14頁。
- 5 Sidney P. Moss, *Poe's Major Crisis: His Libel Suit and New York's Literary World* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1970), p. 34.
- 6 *Ibid.*, pp. 77-85.
- 7 Sidney P. Moss, *Poe's Literary Battle: The Critic in the Context of His Literary Milieu* (Durham, N.C.: Duke University Press, 1963), p. 190.
- 8 ポーは1846年12月15日に、George W. Eveleth 宛に6月9日と10月13日付の手紙に返事を書かなかったことを詫び、「私は6か月以上病氣一しかもその大部分は危

- 険な状態で、普通の手紙すら全然書くことが出来なかった」と述べている。(John Ward Ostrom ed., *The Letters of Edgar Allan Poe* (New York: Gordian Press, 1966), [II], 331. 以下 Ostrom と略す。
- 9 Cf. "1846 ... Poe and family are mentioned as pitiable charity cases in various papers in New York and Pennsylvania," in "Chronology," *Edgar Allan Poe: Essays and Reviews*, "The Library of America" (c1984), p. 1479.
- 10 ポーは上記 Eveleth 宛の1846年12月15日の手紙では「ホーソーン論」が *Godey* 誌の1月号に載ることを匂わせている。(Ostrom, p. 333.)
- 11 *Godey* は1847年1月30日付けで Eveleth 宛に、ポーの「ホーソーン論」はすぐに出版されると釈明し、恐らく再度 Eveleth に問われたためだと思われるが、8月6日には、原稿は三か月前に印刷屋に回してあると説明している。(Dwight Thomas and David K. Jackson, *The Poe Log: A Documentary Life of Edgar Allan Poe 1809-1849* [Boston: G.K. Hall, 1987], pp. 684, 702.)
- 12 Cf. 「Poe と Hawthorne の関係 (その2)」, II, ii.
- 13 B.R. Pollin ed., *The Brevities, Collected Writings of Edgar Allan Poe* (New York: Gordian Press, 1985), Vol. 2, p. 177. 以下 Pollin と略す。
- 14 *American Notebooks, The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne* (Columbus, Ohio: Ohio State University Press, c1972), VIII. 369. 以下本文中に AN を付して頁数を示す。
- 15 T.O. Mabbott, *Collected Works of Edgar Allan Poe*, Vol. II Tales and Sketches 1831-1842 (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1978), pp. 292-3. 以下ポーの短編作品からの引用はこの版により TOM と頁数を本文中に示す。
- 16 Pollin, 2, 180.
- 17 *Ibid.*, 2, 181.
- 18 *Blackwoods' Edinburgh Magazine*, Vol. XXXVII, p. 386.
- 19 *Ibid.*, Vol. XLII, p. 394
- 20 Pollin, 2, 181; TOM, II, 420-121.
- 21 H.M. Belden. "Poe's Criticism of Hawthorne" *Anglia, Zeitschrift für Englische Philologie*, Band XXIII, Neue Folge Band XI (1901), 389. また、Pollin も次のように述べている。"Poe's pitiful efforts at using German (see his handling of 'Leiden') (TOM 1360, 1. 23) and 'Suaid and André' (Pin Intro, para. 2) reveal his unlikely acquaintance with this tale, or the rest of Tieck's works. ... For the negative view of Poe's Germanic culture, see Edwin H. Zeydel, *Univ. of North Carolina Studies in the Germanic Language and Literature*, 1970, 67, 47-54, countered (weakly, I think) by Gustav Gruener, *Modern Philology*, 1904 2, 125-40." (Pollin, 2, 181n).

- 22 *Blackwoods' Edinburgh Magazine*, Vol. XXXIII (Feb. 1833), pp. 206-223.
- 23 Thomas Carlyle, *German Romance: Translation from The German* (New York: AMS Press, 1969), pp. 257-382.
- 24 Merton M. Sealts, Jr. *Melville's Reading*, "Rev'd & Ed'd edition" (Columbia, S.C.: University of South Carolina Press, 1988), pp. 61, 163.
- 25 Belden, pp. 382, 393ff.
- 26 J. Donald Crowley ed., *Hawthorne: The Critical Heritage* (New York: Barnes & Noble, 1970), p. 95.
- 27 *Ibid.*, p. 101.
- 28 *Ibid.*, p. 105, Belden はこの文中の "elsewhere" が何を指すのか不明, 少なくとも *Athenaeum* ではないと言っている。(Belden, p. 386.)
- 29 Daniel Hoffman, *Poe Poe Poe Poe Poe Poe Poe* (Garden City, N.Y.: Doubleday, 1972), p. 101.
- 30 Belden, p. 388.
- 31 この点を Belden は詳しく論じている。(Belden, pp. 387-88.)
- 32 「Poe と Hawthorne の関係 (その2)」, II, i ホストン戦争参照。(Poe; *Essays and Reviews*, "Library of America," p. 759.)
- 33 Belden, p. 398.
- 34 恐らく唯一の例外は Lowell の詩であろう。J.R. Lowell の *A Fable for Critics* (1848) の中でホーソーンは "a Puritan Tieck" と表現されている。だが同時に, "a John Bunyan Fouqué" とも言われている。(The Complete Writings of James Russell Lowell, Vol. XII, *The Poetical Works* [New York: AMS Press, 1966], IV, 57.)
- 35 Belden, p. 395.
- 36 *Ibid.*, p. 402-4. ホーソーン の *Mosses* (1846年6月出版) に収録されている作品で, このティークの "The Friends" が *Democratic Review* の1845年5月号に掲げられた後で執筆されたのは, 序章の The Old Manse だけである。ホーソーンが "The Friends" を原書で読んだ可能性も殆ど考えられないので (Belden, p. 403), *Mosses* に関してティークとの間にいわゆる影響関係はないと断言してよい。
- 37 H.H. Waggoner, *Hawthorne: A Critical Study* ("revised edition": Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1963), p. 124.
- 38 "The Raven" について Edward H. Davidson は次のように述べている。"Poe was confined to conventional religious and allegorical designs: the self is a castle, death is a valley, thought is an angelic creator, evil is a black monster, death is the blackness of night, and final annihilation is the ultimate *thm* 'Thule'"

(*Poe: A Critical Study* [Cambridge, Mass. Harvard University Press, c1957], p. 83).

39 Davidson, pp. 181-222. Davidson はポーの短編小説をアレゴリーと見なし、彼の研究書の第7章を *The Tale as Allegory* と題している。

40 Henry James, *Hawthorne* ("Dolphin Books": Garden City, N.Y.: Doubleday, n.d.), p. 59.

41 Herman Melville, "Hawthorne and His Mosses," *Literary World*, 17 & 24 August, 1850 in Crowley, pp. 111-126

42 *Ibid.*, pp. 115-116.

Synopsis

A Study of the Relationship between Poe
and Hawthorne, Part III
— Poe's 1847 Criticism

Nobunao Matsuyama

When Hawthorne's *Mosses from an Old Manse* was published in June, 1846, Hawthorne sent a copy to Poe and wrote a covering letter. No direct responses to these are known until Poe's criticism, "Tale-Writing," appeared in *Godey's* magazine in November, 1847. In the light of the considerations in my previous papers,* the following topics in relation to this 1847 criticism remain to be examined:

1. Denial of Hawthorne's originality
2. Accusation of Hawthorne's "strain of allegory"
3. Advice for separation from "the impudent clique"

Though not without high appraisal of Hawthorne's style and humor and the insistence on the merit of short compositions, the 1847 criticism reveals Poe's altered attitude from high evaluation to denial of Hawthorne's originality. This is due to Poe's discovery of the similarity of Hawthorne's manner with that of Ludwig Tieck. However, Poe's knowledge and understanding of Tieck were limited and he seems to have been greatly indebted to other criticisms in which Hawthorne is connected to Tieck. But H.M. Belden has suggested that Tieck's "The Friends" published in *Democratic Review* is very close to Haw-

thorne's "moralized legend" and that there is a high possibility that Poe read this story and came to believe in the identicalness of Hawthorne's manner with that of Tieck.

In the 1842 criticism Poe did not say anything against allegory, while in 1847 Poe declaimed against allegory in general and criticised Hawthorne's "strain of allegory" despite the fact that Poe himself is author of not a few allegories or allegory-like stories. In the 1847 criticism Poe did not deal with individual stories and we have to ask how he read such stories as "Young Goodman Brown" or "Rappacini's Daughter." Undoubtedly they are allegory-like stories and some might claim them pure allegories. But as H.H. Waggoner suggested, their complex texture qualifies and deepens the meanings implied in the structure. Hence our dissatisfaction with Poe's reading.

Poe's criticism against the strain of allegory is due to his belief that Hawthorne's "spirit of 'metaphor run-mad'" is imbibed from the atmosphere of "the impudent clique" of New England intellectuals. In 1842 Poe revealed his suspicion of Hawthorne's connection with the clique but in 1847 Poe revived that suspicion and advised him to cut the connection with that group. Thus Poe's criticism of Hawthorne, started in 1842 with his high appraisal of Hawthorne denying his own suspicion against Hawthorne's connection with the impudent clique, came back to the realization of that suspicion with the denial of allegory. However, his unconvincing criticism is to be supplanted by Henry James's criticism of Hawthorne's allegory.

Furthermore, while declaiming against Hawthorne's strain of allegory Poe yet spoke highly of Hawthorne's "Indian-summer sunshine" as shown in "Wakefield" and "Little Annie's Ramble." Some two

and a half years later Herman Melville wrote the criticism of *Mosses* referring to individual stories and supplied the insight Poe lacked into the other side of “the Indian-summer sunlight,” i.e., the “blackness” of Hawthorne.

Thus starting with Poe’s 1842 criticism, the Poe-Hawthorne relationship came to an end with the 1847 criticism through various stages of intervening years. Authors of short stories, they were conscious of each other’s achievements, but in spite of, or rather, because of, Poe’s 1842 criticism, Poe’s efforts to solicit Hawthorne’s story failed and they never came to close terms. Poe died in 1849 without knowing Melville’s criticism of *Mosses* and the closer relationship that ensued from the criticism.

Note

*“‘Something which resembles plagiarism’: A Study of the Relationship between Poe and Hawthorne —Poe’s Criticism of Hawthorne, 1842,” published in the combined issue of Nos. 47 & 48 of *Doshisha Studies in English* (『同志社大学英語英文学研究』) (March 1989) and “A Study of the Relationship between Poe and Hawthorne, Part II —1842–1846,” published in No. 49 of *Doshisha Studies in English* (October, 1989).